

平成25年度 G小学校

研究テーマ

発達障がいのある児童への理解と支援

1. 課題設定の趣旨

本校は、児童数132名、普通学級6学級の小規模校である。児童の中には、学習理解の困難、友だちとの対人関係上の課題、生活指導上の課題等の教育的配慮が必要な児童が数多くいる。毎月行われる職員会議後の生活指導報告会では、発達障がいのある児童、また、その傾向にある児童のケースが含まれることも多い。

今年度、特別支援学級は2学級が設置され、8名の児童が在籍している。また、通常学級には発達障がいのある児童、その傾向のある児童が数多く在籍しており、適切な支援を必要としている。しかし、今年度、教職員の半数が入れ替わり、発達障がいのある児童についての共通理解が不十分さや、認識度の差など学校全体として取り組みが課題となった。

そこで、専門機関との連携を積極的に進めながら、専門的な視点から、発達障がいの子どもへの理解や具体的な支援のあり方を探ることにした。また、個別の指導計画の作成と計画に基づいた実践のあり方についても取り組んでいこうと考えた。

2. 実践・研究の計画、方法

時 期	実践・研究内容
5月	<ul style="list-style-type: none">支援の必要な児童の実態把握「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」の作成・検討。支援の必要な児童の共通理解
6月	<ul style="list-style-type: none">指導主事による巡回相談、発達障がいの理解について助言を受け具体的支援について検討「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」の再作成各学級の実態を共通理解
7月	<ul style="list-style-type: none">1学期の支援について評価・反省。情報交換2学期の課題について共通理解特別支援教育コーディネーター研修の伝達講習
8月	<ul style="list-style-type: none">特別支援学級1年生児童の在籍保育所より情報収集校内研修会「発達障がいのある子どもへの理解」
9月	<ul style="list-style-type: none">運動会の参加について個別の指導計画（短期目標）の見直し
10月	<ul style="list-style-type: none">指導主事による巡回相談、発達障がいの理解について助言を受け具体的支援について検討中学校進学に向けての連携・保護者支援について話し合い、助言

1 1 月	<ul style="list-style-type: none"> ・学習発表会の参加について ・校内研修(異動してきた職員対象)「発達障がいのある子どもへの理解と対応」
1 2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期の支援について評価・反省。情報交換 ・3学期の課題について共通理解
1 月	<ul style="list-style-type: none"> ・区特別支援教育コーディネーター連絡協議会で関係幼稚園と連携。情報交換
2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導主事による巡回相談、個別の指導計画についての振り返り 来年度に向けての助言
3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画の最終評価と引き継ぎ。個別の教育支援計画の作成 ・新1年生入級児童の情報収集

※ 校内支援委員会は行事の前後など必要に応じて開いた。

※ 報告会は必要に応じて職員会議後に行った。

※ 教育活動支援員とは週に1回打ち合わせを行った。

(1) 巡回相談での助言を活かして

本校に在籍する支援の必要な児童の中には、落ち着いて学校生活を送ることや、授業に集中することが難しい児童が多い。授業中に集中できない、おしゃべりが多い、手遊びをする、教師から注意や指示されたことに怒る、すねるなどの児童に対して、どのように対応していけばよいのか、どうすれば子どもが意欲的に取り組んでいけるのか、と日々悩むところである。

児童の実態をふまえた教室環境の課題

「目から入る刺激が強すぎて、集中できないので、シンプルに」
「耳で聞いた多くの情報を処理することが苦手であるので、視覚支援を」
「活動の見通しが持てず、不安になるので、学習の流れを提示して」
「パニックになる児童には、クールダウンできる場所と時間を確保」

巡回相談を通してアドバイスされた課題を改善することをねらいとして、各学級担任や特別支援学級では、まず教室の環境整備から取り組みを進めた。

<教室の前面掲示をシンプルにする>

学級目標や掲示物がたくさんあると、周りからの刺激をうまく選択できずに、興味のある方を目移りして、注意が散漫になってしまう。不必要な刺激をなくして、落ち着いた教室にすることが大切。そのために、教室の前面掲示をシンプルにして、よけいなものは、はずすようにした。その結果、教室がスッキリして、落ち着ける環境になった。



<靴箱の整理をする>



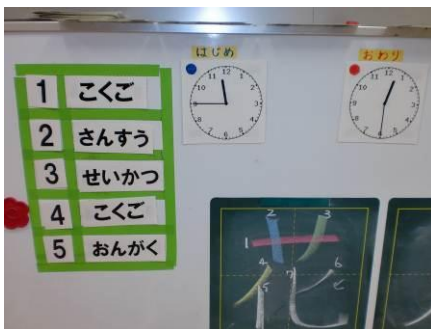
<ロッカーの整理をする>



靴箱やロッカーの中を整理するように声かけしても、「何をどこに入れるか」が分からずに物を放り込んでしまうため、きれいに片付けることができない。片付け方のモデルを提示し、決められた場所へ決められた物を入れられるようにした。その結果、靴箱やロッカーから物がはみ出すことも少なくなり、持ち物の整理ができるようになってきた。

<学習の流れを掲示する>

全体的見通しが持てず、1日や1時間の活動の流れが分からないと不安を感じ、落ち着いて学習に取り組めない児童もいる。新しいことや予定外の出来事に対応することが苦手なため、予め活動の流れや内容を伝えておくことが大切である。各学級、特別支援学級でも、毎朝必ず1日の時間割りを提示し、大まかな学習活動の内容や1日の流れ、授業の始まりと終わりの時刻を確認するようにした。その結果、見通しをもって行動し、スムーズに学習活動に参加できるようになった。

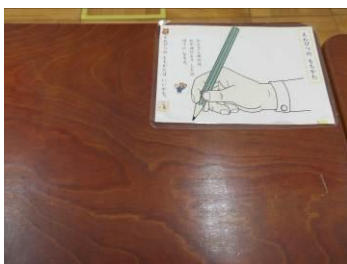


特別支援学級



学級

<姿勢・鉛筆の持ち方に注意する>

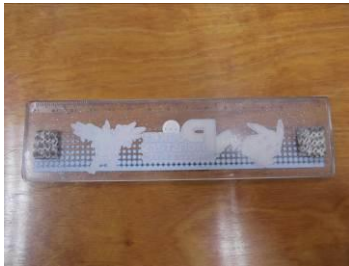


正しい鉛筆の持ち方をいつでも確かめられるよう、1年生の机には、正しい持ち方のモデル図を貼った。高学年で手の動きに困難のあるA児については、本児に合った補助具を用い、正しい

持ち方で文字を書くことを意識させた。また、姿勢の保持が難しく、からだが傾いたり、椅子から滑り落ちる児童のために、特別支援学級では椅子に滑り止めシートを敷いた。椅子から滑りにくくなることで、背筋を伸ばして座れ、姿勢が崩れにくくなった。

<ものさし、立つ位置の支援>

手先の不器用さから、ものさしが固定できず上手く使えない児童には、滑り止めシートを使った。ものさしの裏側に滑り止めシートを貼り、表側には押さえるポイントとなるシールを貼って、ものさしがずれないようにした。



日直や発表で前に出て話す際に、からだが動いたり、黒板にもたれかかる児童のため、床にテープで立ち位置を決めた。立つ位置が明確になったことで、姿勢も良くなり、自信を持って前に立つことができるようになった。

<クールダウン>

友だちとのトラブルや先生からの注意や指示に対して興奮し、みんなと一緒に活動ができなくなってしまった時には、気持ちを落ち着かせるためのクールダウンの場と時間を確保することが必要である。安全で刺激の少ない場所の提供と、誰も関わらない時間がポイントであり、問題行動が、注意喚起の欲求を満たす手段とならないように注意することが必要である。

(2) 個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成と計画に基づいた実践

平成15年度から、個別の指導計画を作成はしているもののやや形骸化しており、記載された情報を共有し、関係教職員が協力しながら役割を果たすところまでには、至っていない状況である。

そこで、指導主事がファシリテーターとなり、2年児童B児の個別の指導計画を実際に立てながら、担任だけでなく、それぞれの立場でどのような支援ができるか、どう指導計画を活かしていけばよいのかを研修することにした。

研修の実際

- ① 個別の指導計画を授業にどう活かすかについてパワーポイントを使って解説
 - ・個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成の仕方や計画に基づいた支援体制のポイント
- ② B児の実態について
 - ・学級での様子(学級担任より)
 - ・発達検査(WISC-IV)の結果(特別支援学級担任より)
- ③ 演習<4～5人のグループでB児の個別の指導計画を立てる>

- ・ B児、B児の家族や周囲の“気になるところ”“できているところ”（リソース）を出し合う。
- ・ 2色の付箋紙を“気になるところ”“できているところ”に分け、模造紙に貼っていく。
- ・ “できているところ”を活かして、“気になるところ”を改善する支援の方法を考える。模造紙に貼りだしたB児の実態をもとに、様々な立場から支援の方法を考える。
- ・ より具体的で、達成したことがわかりやすい目標を立てる。（個別の指導計画）
- ・ 各グループの発表

④ 指導・助言

- ・ 短時間でいろいろな支援の形が提案されて、よい結果になった。
- ・ 担任だけで抱え込むのではなく、今後も校内全体で支援体制を整えることが重要である。人によって対応が異なると児童の戸惑いにつながるため、児童の特性と目標を全職員が知り同じ対応ができるようにする。
- ・ B児の特性として、触覚過敏が考えられる。そのため、B児への不意な接触は避けるなど、個々の児童に合わせた支援の方法を考える必要がある。
- ・ 児童は、「困らせたい」のではなく、「困っている」のだという視点で捉え、何に困っているのか、どう指導・支援していくかを見つけていくことが大切である。
- ・ 「気になる児童」は、様々な場面で自信を失っていることが考えられる。前向きな言葉がけをし、小さな事でもほめて自信を持たせることが大切であることを共通理解して取り組むこと。

4. 実践・研究のまとめと今後の課題

本校の実態として、発達障がいのある児童や困っている児童が思っていた以上に多く、それぞれに応じた指導・支援が必要であるということがわかった。

巡回相談では、担任が困っていることに気づきにくい児童にも視点を向けることができた。また、それぞれの児童が抱えるつまづき、学級の課題などについて、的確に指導・助言していただき、学級指導に活かしていくことができた。困難さを抱える児童が多い学級では、より学級のルールを明確にし、安心して学校生活を送れるように環境を整えることが不可欠であることがわかった。

来年度は、今年度学んだことをさらに実践に活かしていきたい。